

'17

前期日程

教育人間科学系共通 小論文

(教育学部)

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は1冊(3頁)、解答用紙は2枚、下書用紙は2枚です。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所等があった場合には申し出てください。
3. 氏名と受験番号は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

1

下の文章を読んで、「対話」の重要性和「対話の基礎体力」の必要性について本文の表現を用いて説明した上で、対話の基礎体力を育むためにはどのような経験が必要であるか、あなたの経験や考えをもとに具体的に述べなさい。(600字)

「『対話』と『対論』はどう違うのですか?」という質問もよく受ける。

「対論」=ディベートは、AとBという二つの論理が戦って、Aが勝てばBはAに従わなければならない。Bは意見を変えねばならないが、勝ったAの方は変わらない。

「対話」は、AとBという異なる二つの論理が摺りあわさり、Cという新しい概念を生み出す。AもBも変わる。まずはじめに、いずれにしても、両者ともに変わるのだということを前提にして話を始める。

だが、こういった議論の形にも日本人は少し苦手だ。最初に自分が言ったことから意見が変わると、何か嘘をついていたように感じてしまうのかもしれない。あるいはそこに、敗北感が伴ってしまう。

「対話的精神」とは、異なる価値観を持った人と出会うことで、自分の意見が変わっていくことを潔しとする態度のことである。あるいは、できることなら、異なる価値観を持った人と出会って議論を重ねたことで、自分の考えが変わっていくことに喜びさえも見いだす態度だと言ってもいい。

ヨーロッパで仕事をしていると、些細なことでも、とにかくやたらと議論になる。議論をすること自体が楽しいのだろうとしか思えないときも往々にしてある。

三〇分ほどの議論を経て、しかし、たいてい日本人の私(A)の方が計画的だから、その「対話」の結末は、Cというよりは、当初の私の意見に近い「A'」のようなものになる。そこで私が、

「これって結局、最初にオレが言っていたのと、ほとんど変わらないじゃないか」

と言うと、議論の相手方(B)は必ず、

「いや、これは二人で出した結論だ」

と言ってくる。

だが、この三〇分が、彼らにとっては大切なのだ。

とことん話しあい、二人で結論を出すことが、何よりも重要なプロセスなのだ。

幾多の(おそらく私よりも明らかに才能のある)芸術家たちが海外に出て行って、しかし必ずしもその才能を伸ばせないのは、おそらくこの対話の時間に耐えられなかったのではないかと私は推測している。様々な舞台芸術の国際協働作業の失敗例を見ていくと、日本の多くの芸術家は、この時間に耐えられず、あきらめるか切れるかしてしまうのだ。日本型のコミュニケーションだけに慣れてしまっていると、海外での対話の時間に耐えきれずに、「何でわからないんだ」と切れるか、「どうせ、わからないだろう」とあきらめてしまう。演劇に限らず、音楽、美術など、どのジャンルにおいても海外で成功している芸術家の共通点は、粘り強く相手に説明することをいとわないところにあるように思う。日本では説明しなくてもわかってもらえる事柄を、その虚しさに耐えて説明する能力が要求される。

私はこの能力を、「対話の基礎体力」と呼んでいる。そして、小中学校の先生方には、

「対話の技術は大学や大学院でも身につきますから、どうか子どもたちには、この『対話の基礎体力』をつけてあげてください」

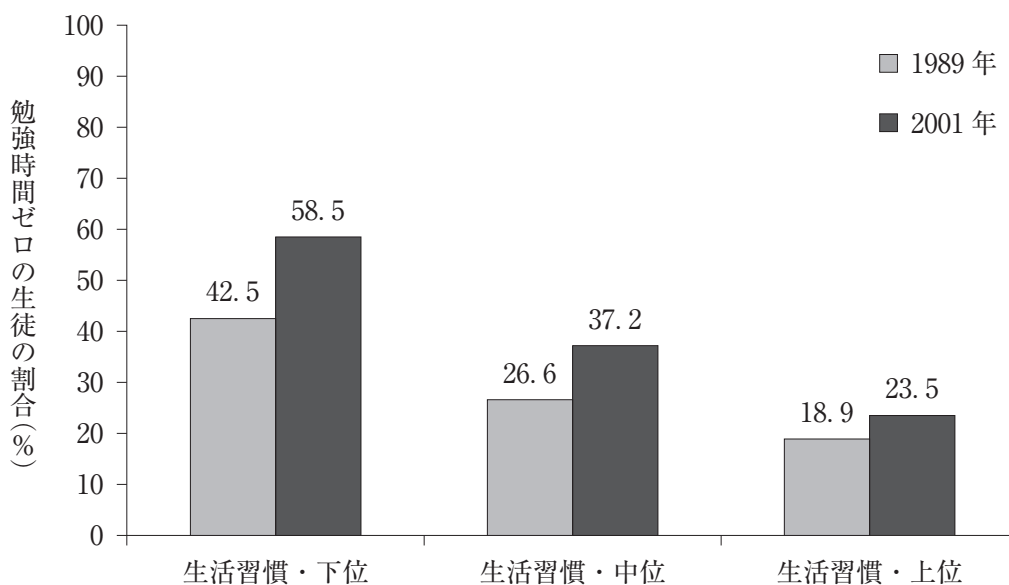
とお願いしてきた。

異なる価値観と出くわしたときに、物怖じせず、卑屈にも尊大にもならず、粘り強く共有できる部分を見つけ出していくこと。ただそれは、単に教え込めばいいということではなく、おそらく、そうした対話を繰り返すことで出会える喜びも、伝えていかなければならないだろう。

意見が変わることは恥ずかしいことではない。いや、そこには、新しい発見や出会いの喜びさえある。その小さな喜びの体験を、少しずつ子どもたちに味わわせていく以外に、対話の基礎体力を身につける近道はない。

出典：平田オリザ (2012) 「わかりあえないことから—コミュニケーション能力とは何か—」 講談社現代新書(表記を一部改変)

2 下の図は、1989年と2001年に同一学区内の公立中学2年生の生徒(1989年は3021人、2001年は1281人)に対して行ったアンケート調査をもとに作成されたものである。この図には、「朝、自分で起きる」「朝食を食べる」など、家庭で身につけるべき基本的な生活習慣の習得に関する得点をもとに分けられた下位・中位・上位という3つのグループごとに、家で勉強する時間がゼロである生徒の割合が示されている。この図から読み取れる調査の主な結果をまとめた上で、なぜその結果が得られたのか考察しなさい。(600字)



出典：荻谷剛彦(2008)「学力と階層」朝日新聞出版(表記を一部改変)